

翻訳にあたってのヒント

その8

日本語の「語尾」と状況にあった適切な「言葉遣い」について考える

先日は、日本語の「語順」について書きました。

そこでは、“I give it to you.”あるいは”I give you it.”という極めて簡単なわずか2パターンの英語文を日本語に訳すとすると、少なくとも以下の14パターンに訳出できるという事例を紹介しました。

「主語～が」で叙述する場合：

- ① 「私がそれをあなたにあげる」
- ② 「私があなたにそれをあげる」
- ③ 「あなたにそれを私があげる」
- ④ 「あなたに私がそれをあげる」
- ⑤ 「それを私があなたにあげる」
- ⑥ 「それをあなたに私があげる」

「主語～は」で叙述する場合：

- ⑦ 「私は、あなたにそれをあげる」
- ⑧ 「私は、それをあなたにあげる」
- ⑨ 「あなたには、私がそれをあげる（あなたは、私からそれをもらう）」
- ⑩ 「あなたには、それを私があげる（あなたは、それを私からもらう）」
- ⑪ 「それは、私があなたにあげるものだ」
- ⑫ 「それは、あなたに私があげるものだ」
- ⑬ 「あげるのは、私からあなたへのそれだ」
- ⑭ 「あげるのは、それで私からあなたへのものだ」

そこで今回は、直感的に理解できるよう、前回と同じ“I give it to you.”あるいは”I give you it.”という英文を引き合いにして、日本語の語尾について考えてみることにいたしましょう。実務翻訳の現場や教育界では、この問題はほとんど関心が寄せられず、教える人によっては翻訳する人のセンスの問題だなどと軽くあしらわれてしまっておりますが、実務翻訳の世界でも実はスピーチ原稿や講演文、広告文、談話、インタビューなどの、会話調の文章を訳出しなければならない場面に遭遇することが多々あり、無視できない問題として採り上げることにしました。

それでは、試訳に移ります。

- ① やるよ、やるわ、やるね、やるってば、君にやるのだ、君にやるのさ
- ② あげる、あげるよ、あげるわ、あげるね、あげるわよ、あげるさ、あなたにあげるんだ、あなたにあげるのさ
- ③ とっついて、とっついてね、とっときな、とっつけよ
- ④ もらっついて、もらっついてね
- ⑥ 受け取って、受け取ってね
- ⑦ 受け取ってください、お受け取りください（ませ）、ご笑納ください（ませ）
- ⑧ 贈呈いたします、授与いたします、供与いたします、進呈いたします、差し上げます、etc.

以上からお分りのように、語尾（～よ・わ・ね・さ・だ・る・ます等）や言葉遣いの使い分けに応じてその言わんとする意味、含意が微妙に違ってくるのが分かります。加えて、言った本人が、男性、女性、子供、大人、老人であるか、企業経営者、役人、政治家、学者、医師、技師、労働者、家庭の主婦、幼児、小学生、中学生、高校生、大学生等々であるかの、身分の違いによってもそれぞれの状況や地位にあった適切な表現や言葉遣いを考えて様々に訳し変えなければならないということも理解できます。

日本の英語教育では、英文の意味を理解させることを重視しすぎたため、英語と日本語の表現の対比をおろそかにしてきました。日本語のリズム、表現力、敬語（丁寧語・尊敬語・謙譲語：ただしこれについては、日本に長年根付いていた封建制度による煩雑な文化資産かもしれない）、豊かさ、多様性などを支えているともいえる「語尾」そして「適した言葉」への訳し方は、無視され続けております。

こんなところにも、最長で10年間英語を勉強し一流大学を出ても実用に耐える翻訳ができないという人達を多数生み出してしまっている我が日本の実状が見え隠れしております。

ちなみに欧米では、社会のいろいろな階層の人々の表現様式を研究する学問分野である、比較文体学（comparative stylistics）という講座を設けて翻訳・通訳者の養成を行っている大学があり、学生の翻訳力の向上に非常に貢献しているそうです。

究極の翻訳文とは、原文と訳文を比べてどちらが翻訳か分からない文章だとよく言われます。英語の翻訳をやっているという、英語ができるから翻訳の仕事をしているのだというのが一般的な見方でしょうが、実は日本語もそれ以上に大切で日本語の勉強が不可欠です。英米人だってちゃんと学校に国語（つまり英語）という学科があるのですから・・・。

ただし、実務翻訳の世界でものをいうのはそういった日本語文法や文学・古典の勉強や知識ではなく（そういった分野の研究は国語文法学者や文学評論家などの専門家にまかせておけばいいが、英語の文法は無視できず勉強が欠かせない）、各々の業界や資料に合った学校では絶対に習得できない適切な言葉遣いのテクニックや語彙の蓄積であり、そのためには各業界・分野ごとにできるだけ多くの資料に目を通し、逐一メモったり、私製辞書を作成したり、用語集をつくったり、資料を揃えたりしなければなりません。

最後に、「日本語と英語は対等な言葉」であり、どちらかが優れておりどちらかが劣っているというのではなく、日本語は日本人が長い年月をかけて編み出してきた世界に冠たる文化資産であり、英語もそうだということを明記しておきます。そしてこれは、フランス語、ドイツ語、スペイン語、中国語等の他の言語にもあてはまる否めない事実であり、それぞれの言語を母国語とする人達の言語（特に書き言葉）が一番優れていると考えております。これは、日本語は日本人の日本語が一番で、英語は英米人の英語が一番だということです。そういった意味では、英語のわかる日本人は英文和訳、日本語のわかる英米人は和文英訳に優れた力を発揮し、その逆の翻訳となると、語感の鋭いネイティブによるチェックが不可欠になる場合があります。こういった事情から、実務翻訳の世界では和文英訳の依頼がよくありますが、その場合にはネイティブチェックを入れるように（ただしこの場合は割り増し料金がかかる）という指示が時々あります。また、文芸翻訳の世界では、和文英訳はほとんどが英米人により行われているという現状がみられます。